国立国語研究所学術情報リポジトリ

Rapport Development through Collaborative Construction of Narratives as Seen in Narratives of Difficulty during Study Abroad by Japanese Native Speakers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 陽子, 夏, 雨佳, NAKAI, Yoko, XIA, Yujia メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003689

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 24: 89–112 (2023)
ISSN 2186-1358

ナラティブの協働構築によるラポール形成
――母語話者による留学中の苦労話の語りを通して――

中井陽子[a]　　夏　雨佳[b]

[a] 東京外国語大学／国立国語研究所 共同研究員
[b] 東京外国語大学 大学院生

要旨

本研究では，類似の留学経験を持つ 3 人の日本語母語話者が語り合う留学中の苦労話のナラティブを取り上げ，フォローアップ・インタビューで得られた参加者の意識とともに，話題展開の中でのナラティブの協働構築を分析した。その結果，次の 4 点から，話題展開の中でナラティブの協働構築が行われることによって，参加者間で親近感，仲間意識が高まり，心が通い合った親しい関係，つまりラポール形成に繋がっていることが明らかになった。

(1) 参加者間で「司会進行」を行うことで，類似の経験を持つ 3 人の苦労話を繋いで大話題を展開させており，参加者全員が会話に参加しやすくなり，会話を盛り上げることができていた。
(2) 苦労話の反応部（小話題）で，聞き手が類似体験を簡潔に述べる情報提供をしたり，情報要求や言い換え，同意要求をして興味を示したり，「セリフ発話」で共感や理解を示したりして，語り手と共にナラティブを協働構築していた。
(3) 1 つの大話題として，3 人の参加者が同じ包括的な観点から，類似の苦労話（中話題）をそれぞれ 1 個ずつ語り，互いに情報や意見，感想等を共有して，ナラティブを協働構築していた。
(4) 2 人で共通の経験を協力しながら語ることで，会話を盛り上げていた。

これらをもとに，日本語学習者がナラティブの協働構築を行うことでラポール形成をしていけるようになることを目指した指導学習項目の提案を行った *。

キーワード：ナラティブ，協働構築，話題展開，ラポール形成，フォローアップ・インタビュー

1. はじめに

日常会話において我々は，苦労話等，自身の経験をもとにしたナラティブを語り，相手から共感を得ることがある。そして，ナラティブは語り手が一方的に語るものではなく，語り手と聞き手が協働構築するものであり（Sacks 1974; Ochs et al. 1992; 西川 2005; 井出 2013; 山本 2013，2014 等），語り手と聞き手がナラティブに対する互いの感想や意見を共有することで，親近感や仲間意識を高めたり維持したりするような心が通い合った親しい気持ちを持つ関係，つまりラポール（rapport）形成が行えると考えられる（Tannen 1984, 2005; 植野 2012; 三井 2018 等）。そのため，ナラティブの協働構築の仕方からラポール形成のあり方の一端を探ることができると言える。そ

* 本稿は，国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のサブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」（いずれもプロジェクトリーダー：石黒　圭），および，2019 ～ 2022 年度科学研究費（基盤研究（C））「インターアクション能力育成のための会話データ分析の手法を学ぶ教材開発とその検証」（19K00702，研究代表者：中井陽子）の研究成果の一部である。また，第 46 回社会言語科学会研究大会（2022 年 3 月 4 日，於・オンライン）における口頭発表と大会発表論文集原稿（夏・中井 2022）の内容をもとに大幅に加筆修正を行って執筆した。本研究にご協力くださった皆様，口頭発表の際に貴重なご意見をくださった皆様にお礼申し上げます。

して，これらの知見は，いかに日本語学習者が接触場面の会話に参加してラポール形成を行っていけるようになるかについて考える上で参考になると言える。

なお，「ラポール形成」という用語は，医療・看護場面での医療従事者と患者等の非対称的な人間関係を対象とした研究に多く使用され，感情の交流を安心して行えるような信頼関係構築といった意味で定義されている（内山他 2021[1] 等）。ロングマン現代英英辞典[2] では，rapport について，「人と人の間における親しい承認の気持ちや理解（friendly agreement and understanding between people）」と定義されている。また，Tannen（1986: 93）では，rapport は solidarity（連帯感）と似た親しい気持ちのことであると説明されている。そこで，本研究では，「ラポール形成」について，知人・友人のような対等な関係において，お互いを認め，理解し合うといった親しい気持ちを持つ関係の形成という意味として扱う。

こうしたラポール形成を生むナラティブの協働構築のあり方を考える際は，話題がどのように展開しているか，またその時に参加者がどのように感じていたかも考慮に入れる必要がある。例えば，ある話題に基づいて類似の観点から各自の経験を参加者が互いに語り合ったり，それに対する感想や意見，評価，解釈，関連する情報等を共有したりして，ナラティブを協働構築することで，価値観が共有され，仲間意識を高める効果があるとされている（Tannen 1984, 2005; 植野 2012; 三井 2018 等）。よって，話題展開の中でどのようにナラティブを共有しつつ，仲間意識を高めてラポール形成を行っているのかについて，目に見える参加者の言語行動，非言語行動とともに，表面化されない会話時の意識も踏まえて多角的に分析する必要があると言える。

だが，これまでのナラティブの研究は，語りの構成要素[3] や，語り手と聞き手の相互行為，言語行動・非言語行動等に着目するものが多く（Labov 1972; Sacks 1974; Ochs et al. 1992; Tannen 1984, 2005; Maynard 1989; 李 2000; 西川 2005; 植野 2012; 井出 2013; 三井 2018; 山本 2013, 2014 等），参加者の意識に着目しつつ，話題展開の中でナラティブがどのように協働構築されてラポール形成を行っているかを分析するものは管見の限りないため，詳細に分析する必要がある。

そこで，本研究では，類似の留学経験を持つ 3 人の日本語母語話者が語り合う留学中の苦労話のナラティブを取り上げる。そして，フォローアップ・インタビュー（FUI）で得られた参加者の会話時の意識を参考に，どのように話題展開の中で言語・非言語行動を用いながらナラティブの協働構築が行われているのかを分析する。これにより，参加者がいかにナラティブを協働構築

[1] 内山他（2021: 10）では，ラポールについて「相互に信頼し合い，感情の交流を安心して行える関係が成立している状態」と定義し，「看護師が患者に対して行うラポール形成の要素や技術」に焦点を当てた研究論文 33 件を検索・分析している。分析の結果，ラポール形成を導く要素として，「患者を知ろうとする姿勢を持つ」「患者の価値観を尊重する」「患者に理解的態度・共感・関心を示す」「患者の話を傾聴する」「質問，反復，言い換え，頷き，相づち，アイコンタクトを行う」「患者－看護師間で情報を共有する，同じ目的を目指す」「看護計画立案に患者が参加できる工夫をする」「患者の思いや意思を引き出す」「思いを確認し合い相互作用をもたらすように関わる」「同情的背景が存在する」「看護師に類似体験がある」等（筆者ら要約）が見られたとしている。本研究で分析する日本語母語話者間のナラティブも，こうしたラポール形成の要素が共通して見られると考えられる。

[2] ロングマン現代英英辞典「rapport」（https://www.ldoceonline.com/jp/dictionary/rapport）

[3] Labov（1972）は，完全に展開された（a fully-formed）ナラティブには，「導入部（Abstract）」，「方向付け部（Orientation）」，「展開部（Complicating action）」，「結果部（Result or resolution）」，「終結部（Coda）」，「評価（Evaluation）」という 6 つの構成要素（elements）があると指摘している。

しながら互いの価値観を共有し，ラポール形成をしているかを探り，日本語の会話教育のための指導学習項目の提案を行う。

2. 先行研究

本節では，本研究の分析の枠組みとして重要となる先行研究について述べる。まず，2.1 でナラティブの定義と連鎖組織，2.2 で日本語母語場面におけるナラティブの協働構築，2.3 で話題展開についてまとめ，次に，2.4 で先行研究のまとめと本研究の位置づけを述べる。

2.1 ナラティブの定義と連鎖組織

ナラティブを指す概念を表す際，物語，ストーリー，体験談等，様々な用語が使われているが，概ねどれも過去に起こった出来事を時系列に語ることを指していると言える。例えば，Labov（1972: 359–360）は，ナラティブを「言語による節の連鎖と実際に起こった出来事の連鎖を整合して過去の経験を要約して話す（recapitulate）1 つの方法」（筆者和訳）と定義している。そして，最小のナラティブ（minimal narrative）には，「そして」，「で」等の接続詞で表現される，少なくとも 1 つ以上の時間的接合点（temporal juncture）が含まれる必要があり，何回も起こった過去の一般的な出来事（general events）を例として挙げているものはナラティブとして認定できないとしている（Labov 1972: 360–361）。

また，Tannen（1984, 2005: 123）はストーリーを「過去に起きた出来事を詳述して再現する（recount）こと」（筆者和訳）と定義し，李（2000: 8）は物語を「過去に発生した出来事を雑談の中で報告すること」と定義している。

さらに，Sacks（1974: 337）は，日常会話におけるストーリーの形で語られる冗談には連鎖組織（sequential organization）があるとし，表 1 のように，「前置き（preface sequence）」，「語り部（telling sequence）」，「反応部（response sequence）」という 3 つの隣接して並んだ連鎖から成るとし，これらは語り手と聞き手の相互行為によるものだとしている。

表 1　ストーリーの連鎖組織（Sacks 1974，筆者要約和訳）

前置き	語り手がストーリーを語り始める申し出や許可求めをし，聞き手と交渉したりする部分（pp.340–341）
語り部	語り手が発話権（floor）を保持し，ストーリーのオチ（punchline），結末（completion）まで語る部分（p.341, 344, 347）
反応部	聞き手が笑いや沈黙によってストーリーに対する理解や評価を示す部分（pp.347–350）

そして，Tannen（1984, 2005）は，感謝祭の食事会中の会話に現れるストーリーに着目し，参加者達が類似した観点や話題で各自の体験を語っていくことを「まわしストーリー（story round）」と呼んでいる。「まわしストーリー」は，意味的結束性（thematic cohesion）があり，ナラティブの「前置き」（例：Did I tell you what happened…）を語る必要性が低いという特徴があるという。また，参加者間で「まわしストーリー」を行い，それに対して互いに評価，質問等の積極的な反応を行うことで，参加者間のラポール形成に繋がりうると指摘している（Tannen 1984, 2005）。

2.2 日本語母語場面におけるナラティブの協働構築

日本語母語場面におけるナラティブの協働構築に関する研究としては，植野（2012），山本（2013, 2014），三井（2018），串田（1999）等がある。植野（2012）では，親しい学生同士の語りを分析した結果，聞き手が語りの内容に対して自らの経験や知識，思いを述べながら語り手に働きかける様子が見られたとしている。そして，そうした聞き手の行動は，語り手との親密で対等な関係性を創出・維持するために重要であるとしている。

そして，山本（2013, 2014）は，友人知人同士の会話の中で語られる物語を抽出し，物語の受け手（聞き手）が用いる「セリフ発話」（物語の登場人物の声として聞かれる発話）に着目している。そして，語り手が語る物語の途中で，いかに受け手が声色の変化や身体的動作を伴った「セリフ発話」を用いて登場人物になりきって参入しているかを分析している。その結果，「セリフ発話」によって，受け手が物語の描写の焦点を的確に理解していることを示すとともに，より積極的に物語の構築に貢献していることを明らかにしている。

さらに，三井（2018）は，日本語母語場面で語られるナラティブの反応部において，語り手と聞き手が登場人物達の奇妙な行動に対する評価，意見・解釈を述べることで，登場人物達と自分達との価値観の差異を際立たせ，自分達が共通の価値観を有していることを確認し合うことで，仲間意識を高めている様子を分析している。

また，串田（1999）は，日本語母語場面のデータをもとに，物語の源泉となる出来事に共に参与した者達が「共－語り手候補（possible co-teller）」（Lerner 1992）となる現象を分析している。「共－語り手候補」とは，語り手と同じ知識や経験を持つ参加者がストーリーに参入し，「協働構築者（story consociate）」となり，語り手が語るストーリーを聞きながらその内容を修正したり，詳述したりすることによって，語り手と共にストーリーを構築する者のことである（Ochs et al. 1992, Lerner 1992）。そして，串田（1999）は，二人の「共－語り手候補」が舞台上の役者のように，互いに向けたやりとりを聞き手に見せるという形で，物語の詳述を補足しながら共に出来事を報告する「掛け合い物語り」について分析している。

2.3 話題展開

上述の通り，日常会話に見られるナラティブは，参加者間で類似の観点･話題のもとでナラティブが連続して語られることがあり，また，ナラティブの連鎖組織の途中で内容のまとまりを持つ小さな話題がそれぞれ展開されていることも少なくないと考えられる。そのため，ナラティブの連鎖組織と話題の関係に着目する必要がある。

会話における「話題」の定義は，様々なものがある。その中でも，南（1981: 91）は，話題について「まとまった意味」から成るものと定義している。また，三牧（1999: 50）は，「会話の中で導入，展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体」を話題として定義し，話題を階層的な構造で捉え，大話題とその下位話題である小話題に区分している。さらに，中井（2012: 70）は，話題を「話している内容や場所によって連続的なまとまりをもった単位であり，その前後に沈黙等のまとまりの切れ目を示す要素が来るもの」と定義している。そして，会話データの話題認定

を行う際の基準として，話題開始部（フィラー，接続表現，コ系指示表現，質問表現，「のだ」文），話題終了部（評価的発話，母音の引き延ばし，あいづちの連続），沈黙，内容のまとまり，言及の対象等を挙げている（中井 2012）。

さらに，佐藤他（2022）は，ザトラウスキー（1993, 2003），三牧（1999），中井（2012）を参考に，雑談での話題を「会話の中で，導入･展開された内容のまとまりを持った発話の集合体で，その前後に沈黙等の切れ目を示す要素が来るもの」と定義している。そして，雑談の話題展開を見るために，隣接する複数の関連話題を包括的にまとめて 1 つの「大話題」とし，その中に含まれる下位話題を「中話題」，中話題に含まれる下位話題を「小話題」として，階層的に捉えて分析を行っている（佐藤他 2022）。

2.4 先行研究のまとめと本研究の位置づけ

以上の先行研究から，1 つのナラティブは「前置き」「語り部」「反応部」といった 3 つの連鎖組織から成り，さらに参加者間で類似の観点・話題の「まわしストーリー（story round）」を語ってナラティブを共有することで，参加者間で仲間意識が高まり，ラポール形成に繋がりうることが分かる。こうした「まわしストーリー」は，参加者が互いに語り手になることによって行われるため，ナラティブの協働構築であると言える。そして，ナラティブの協働構築は，ナラティブの語り手と聞き手の間でも行われ，それによってラポール形成が促進されると言える。例えば，聞き手がナラティブの「反応部」でナラティブに対する評価や意見・解釈を述べたり質問したり「セリフ発話」を用いたりすること，さらに「共－語り手候補」となって共に出来事を語ること等によって，語り手とともにナラティブを協働構築し，互いに価値観を共有することで，参加者間のラポール形成に繋がりうるのである。

しかし，上述の通り，ナラティブの協働構築と参加者のラポール形成の関係性を考察するには，参加者の言語・非言語行動の特徴だけでなく，会話時の意識も踏まえて多角的に分析する必要がある。また，特に日常会話に現れるナラティブは，類似の観点でいくつかのナラティブが連続で語られることで 1 つの包括的な話題（大話題）を形成したり，1 つのナラティブの連鎖組織（中話題）の途中で小さな話題（小話題）が展開されたりすることもあると考えられる。そのため，話題展開の中でのナラティブの連鎖組織のあり方に着目する必要もあると言える。

そこで，本研究では，類似の経験を持つ 3 人の日本語母語話者が語り合う留学中の苦労話のナラティブを取り上げ, FUI で得られた参加者の会話時の意識とともに, 話題展開の中でのナラティブの協働構築を分析し，参加者同士のラポール形成のあり方を詳細に分析することとする。

3. 研究方法

本研究の研究方法について述べる。まず，3.1 で会話データの収集方法について述べ，次に 3.2 で会話データの分析方法について述べる。

3.1 会話データの収集方法

会話の参加者は，中国に 1 年間留学経験のある 20 代の母語話者の女性 J1，J2，男性 J3 で，3 人は中国留学時の知り合いである。3 人はそれぞれ異なる日本の大学から中国に交換留学に行っていたため，日本に帰国後はほとんど会っておらず，会話データ収集日に約 1 年ぶりに会話することになった[4]。J1 と J2 は，中国留学中も，同じ中国語クラスに在籍し，授業内外でも行動を共にすることが多かったとのことである。

会話データは，2021 年 2 月に母語話者 J1，J2，J3 によるオンラインの雑談（20 分 20 秒）を録画したものである（図 1）。会話前に，3 人には中国留学中の苦労話を話すように調査者から依頼しておいた。そして, J1 にオンライン録画機能で雑談の様子を録画してもらった。なお, 会話データは全て文字化した。

会話直後に，各参加者に会話感想シート（会話の全体的な印象，会話相手への印象，会話でうまくいった点, 難しかった点等）[5] を記入してもらった。そして, 会話データ収集後の 1 週間以内に個別に FUI を約 1 時間程度行い，会話相手に対する印象や，発話をした意図等，会話時の意識を尋ねた。なお，全データ収集後，各参加者には，会話データ，FUI のデータ，および，会話データの静止画等を研究に使用してもよいか確認し，「同意書」に署名をしてもらった上で，回収した。

図 1　オンラインでの雑談の様子

3.2 会話データの分析方法

本研究では，Labov（1972），Tannen（1984, 2005），李（2000）を参考に，ナラティブを「日常会話の中で過去の出来事を語るもので，1 つ以上の時間的接合点が含まれるもの」と定義することとする。これをもとに，まず，会話データに現れたナラティブを抽出し，次に，Sacks（1974）の【前置き】,【語り部】,【反応部】（以下，ナラティブの連鎖組織を【　】で示す。）というナラ

[4] J1, J2, J3 は，2020 年 1 月に中国留学を終えて日本に帰国し，その年の 6 月に 1 度，留学仲間の日本人数名でオンライン飲み会を行ったという。J3 は，その後 J1 と J2 とは連絡を取っていなかったそうである。J1 と J2 は 1 度対面で会う機会があったものの，たまに連絡を取り合う程度であったという。
[5] 中井（2012）を参考に作成した。

ティブの連鎖組織ごとに区分を行った。

次に，佐藤他（2022）の「会話の中で，導入・展開された内容のまとまりを持った発話の集合体で，その前後に沈黙等の切れ目を示す要素が来るもの」という「話題」の定義に従い，まずナラティブと認定された留学中の苦労話を「中話題」とした。次に，1つの苦労話の中の【前置き】と【語り部】を1つの「小話題」として認定し，【反応部】に実質的な発話が見られた場合「小話題」として認定した。なお，【反応部】の後にさらに【語り部】が続く場合も別の「小話題」として認定した。さらに，包括的な観点から語られる類似の苦労話のまとまりを1つの「大話題」として認定し，それぞれに話題タイトルを付した。なお，各苦労話の前後に参加者による「司会進行」[6]が見られたため，それを各大話題の繋ぎの部分として認定した。

図2は，ナラティブの【前置き】，【語り部】，【反応部】という連鎖組織（Sacks 1974），「まわしストーリー」（Tannen 1984, 2005）および，話題（大話題，中話題，小話題）の関係をまとめたものである。なお，図中では，ナラティブの連鎖組織を【　】で，話題を（　）で，「まわしストーリー」で省略されうる*【前置き】*を斜体で示してある。

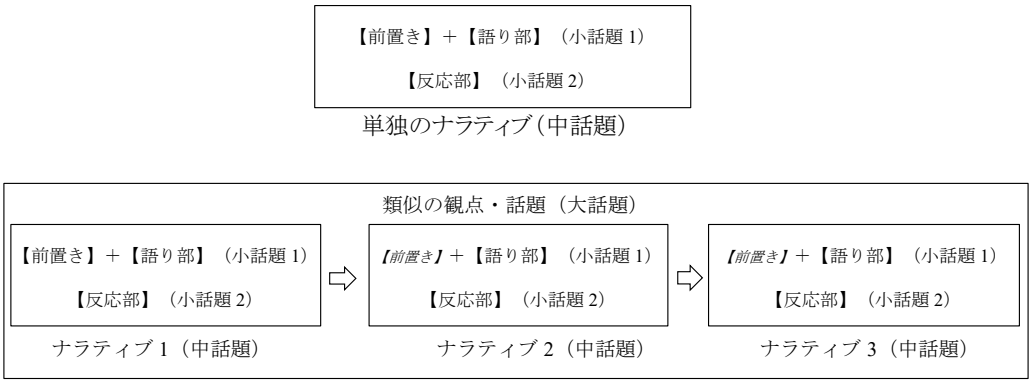

図2　ナラティブの連鎖組織と話題の関係

さらに，会話に見られる実質的な発話[7]は，ザトラウスキー（1993）の発話機能[8]，堀口（1997）

[6] 倉田他（2009）は，日本人学生が参加する大学・大学院の授業での討論を分析し，進行役の発話に，話者指名，進行の提示，展開の促進等の「進行」の発話機能が見られたとしている。そこで，本研究では，話者指名，会話の進行の提示，話題展開の促進に関わる発話を「司会進行」と認定した。

[7] 杉戸（1987）は，発話を「実質的な発話」と「あいづち的な発話」に分類している。まず，「あいづち的な発話」は，「「ハー」「アー」「アーソーデスカ」「サヨーデゴザイマスカ」「エーソーデスネ」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす，オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ！」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の，名詞，動詞など）を含まず，また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話」（p.88）と定義している。一方，「実質的な発話」は，「あいづち的な発話以外の種類の発話。何らかの実質的な内容を表す言語形式を含み，判断，説明，質問，回答，要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話」（p.88）と定義している。

[8] ザトラウスキー（1993: 67–70）の発話機能にある，「情報提供」（実質的内容を伝える発話で，客観的事実に関する質問に対する答えも含む），「同意要求」（相手の同意を求める発話で，「でしょ？」・「よねえ。」・「じゃない？」で終わることが多い），「情報要求」（情報の提供を求める発話で，「質問」の類が多い），「感想の注

の聞き手行動[9]，山本（2013, 2014）の「セリフ発話」等を参考に，ナラティブの語り手による＜情報提供＞，＜同意要求＞，および聞き手による＜情報要求＞，＜感想＞，＜共感＞，＜同意＞，＜言い換え＞，＜セリフ発話＞に分類した。また，「司会進行」の発話は，倉田他（2009）を参考に，＜話者指名＞，＜会話の進行の提示＞，＜話題展開＞に分類した。なお，実質的な発話の発話機能，および「司会進行」の発話機能を＜　＞で示す。

なお，先行研究にある「親密で対等な関係性」（植野 2012），「仲間意識」（三井 2018）等の用語，および，辞書[10]での意味を踏まえ，ナラティブの協働構築により得られる「親近感」と「仲間意識」について，以下のように定義することとする。まず，「親近感」とは，ナラティブの協働構築において，参加者達が理解・共感を示し合うことで，いつも接しているような親しみを感じ，心を許せるといった気持ちのこととする。次に，「仲間意識」とは，同じ経験や関心，価値観を共有している同一集団であるという気持ちのこととする。これらの気持ちを持つことによって，ラポール形成に繋がりうると考える。

以下，4 節では，具体的な会話例を示しながら，参加者が FUI で語った会話時の意識を参考に，どのように大話題，中話題，小話題といった話題展開の中で，言語・非言語行動を用いながらナラティブの協働構築が行われ，それによって参加者同士のラポール形成が行われているかについて分析を行う。なお，会話例は，表 2 の文字化表記方法をもとに示す。【語り部】における聞き手の反応は語り手の発話の中に挿入し，（　）に入れて示す。

表 2　文字化表記方法（ザトラウスキー（1993），中井（2012）をもとに作成）

。	下降調か平調のイントネーションで文が終了することを示す。
，	ごく短い沈黙，あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句，副詞，従属節」等の後に記す。
?	疑問符ではなく，上昇調のイントネーションを示す。
ー	「ー」の前の音節が長く延ばされていることを示す。
//	// の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。
(1.0)	沈黙の秒数を示す。
{　}	{　} の中の行動は非言語的な行動の「笑い」等を示す。ただし，発話中に他の参加者の頷き等の非言語行動が見られた場合は，その発話の中に（J1：{ 頷き }）等と示す。
(xxx)	聞き取り不能の発話を示す。

4. 話題展開におけるナラティブの分析

本節では，分析結果について述べる。まず，4.1 で話題展開におけるナラティブの特徴について述べ，次に，4.2 でナラティブの協働構築によるラポール形成の特徴について述べる。

目表示」（相手が言った事柄に対して感想を述べる），「共感の注目表示」（相手と同じ感情をいだいていることを示す。＜同意要求＞，＜単独行為要求＞の後に続くことが多い），「同意の注目表示」（他の注目表示を受ける発話の機能）を参考に，語り手，聞き手による実質的な発話の発話機能を認定した。

[9] 堀口（1997: 68）の聞き手行動にある「言い換え」（話し手の発話の内容を聞き手が自分のことばで再現すること）も参考にし，実質的発話の発話機能の分類に入れた。

[10] 実用日本語表現辞典では「親近感」を「いつも接しているかのような雰囲気があり心を許せるといった印象や雰囲気を指す表現。親しみを抱くことができる感じ」（https://www.weblio.jp/content/%E8%A6%AA%E8%BF%91%E6%84%9F），デジタル大辞泉では「仲間意識」を「共通の関心や利害をもった集団の，仲間としての連帯感」（https://www.weblio.jp/content/%E4%BB%B2%E9%96%93%E6%84%8F%E8%AD%98）という意味であると説明されている。

4.1 話題展開におけるナラティブの特徴

分析の結果，まず，収集した会話データから，大話題（中国留学に関する話題）が 9 個見られ，その中で中話題（J1，J2，J3 による苦労話）が 14 個見られた。また，中話題のうち，2 人の参加者が「共－語り手候補」になって協働構築した苦労話（中話題 7-1, 中話題 8-1）が 2 個見られた。

表 3 は，J1，J2，J3 による会話で見られた，大話題，中話題，小話題（苦労話の【前置き】，【語り部】，【反応部】）の展開の詳細を示している。各話題には，話された内容が分かるように話題タイトルを付して，話題番号をつけた。【反応部】は実質的な発話が見られたもののみ「小話題」と認定し話題番号を付している。一方，【反応部】であいづち的な発話しか見られなかったものは 1 つの独立した「小話題」として認定せず，【語り部】の一部としたため，【反応部】の話題番号を付していない。なお，表中の各大話題の繋ぎとしての「司会進行」の部分を網掛けで示し，大話題の発話番号，「司会進行」を行う参加者と各話題の主な発話者を（　）で示している。

表 3　母語話者 J1，J2，J3 による会話の大話題，中話題，小話題

大話題（中国留学の話題）	中話題（J1,J2,J3 による苦労話）	小話題（苦労話の前置き・語り部・反応部）	
		【前置き】・【語り部】	【反応部】（理解・評価を示す）
1. 他の国の留学生との文化の違い（1-25）	司会進行（J3）		
	1-1 苦労話：「他の国の留学生に怒られた話」（J1）	1-1-1 苦労話（J1）	1-1-2 反応：「言われたのが怖かった」（J2,J3）
2. 中国と日本の文化の違い（26-71）	司会進行（J3）		
	2-1 苦労話：「中国人の聞き返しの仕方」（J2）	2-1-1 苦労話（J2）	2-1-2 反応：「知識として知っていても，怖い」（J1,J3）
	2-2 苦労話：「中国人の時間の概念」（J1）	2-2-1 苦労話（J1）	2-2-2 反応：「仲良くなればなるほど，時間は適当になる」（J2,J3）
	2-3 苦労話：「感謝の回数が少ない」（J2）	2-3-1 苦労話（J2）	2-3-2 反応：「文化が全然違う」（J1,J3）
3. 中国語力が足りない（72-135）	司会進行（J1,J2,J3）		
	3-1 苦労話：「中国語力が足りず，外に行くのが怖い」（J2）	3-1-1 苦労話（J2）	3-1-2 反応：「話しかけられたらどうしよう」（J1,J3）
		3-1-3 苦労話（J2）	3-1-4 反応：「間違ってもいい」（J1,J3）
	司会進行（J2）		
	3-2 苦労話：「言語面が一番大変だった」（J3）	3-2-1 苦労話（J3）	3-2-2 反応：「バスが怖かった」（J1,J2）
4. 中国での食生活（136-179）	司会進行（J3）		
	4-1 話題：「なんでも食べた」（J1）	—	
	4-2 苦労話：「パクチーが食べられなかったが帰国後好きになった」（J2）	4-2-1 苦労話（J2）	4-2-2 反応：「すごいな」（J1,J3）
	4-3 苦労話：「帰国後パクチーが好きになった」（J1）	4-3-1 苦労話（J1）	反応：あいづちのみ（J3）
	司会進行（J1,J2）		
	4-4 苦労話：「日本の味の物が食べられず大変だった」（J3）	4-4-1 苦労話（J3）	4-4-2 反応：「急に恋しくなる時がある」（J1,J3）

5. 中国の病院（180-220）	司会進行（J3）		
	5-1 苦労話：「病院の待ち時間が長い」（J1）	5-1-1 苦労話（J1）	反応：あいづちのみ（J2, J3）
	5-2 苦労話：「医者が説明してくれた単語が難しい」（J3）	5-2-1 苦労話（J3）	5-2-2 反応：「専門用語がよく分からない」（J1, J2）
6. 言語のニュアンス（221-284）	司会進行（J2）		
	6-1 苦労話：「休みの連絡で先生に怒られた」（J1）	6-1-1 苦労話（J1）	6-1-2 反応：「言語のニュアンスが分からない」（J2, J3）
7. 授業の開始時間が早い（285-303）	7-1 苦労話：「授業の開始時間が早い」（J1, J3）	–	
8. 方言が理解できない（304-355）	8-1. 苦労話：「警備員の方言が分かりにくい」（J1, J2）	8-1-1 苦労話（J1, J2）	8-1-2 反応：「一番もどかしさを感じる時」（J1, J2）
9. 留学生活の感想のまとめ（356-373）	9-1 まとめ：「苦労したが，結局楽しい留学生活が送れた」（J1, J2, J3）		

ここから，会話全体で，留学中の様々な側面について，3 人が話題数の多少の差はあれ，それぞれ苦労話のナラティブ（中話題）を語っていることが分かる（J1: 7 個，J2: 5 個，J3: 4 個）。

4.2 ナラティブの協働構築によるラポール形成の特徴

上掲の表 3 の話題展開，および J1，J2，J3 が記入した会話感想シート，FUI の結果を踏まえて分析した結果，次の 4 点のように，大話題，中話題，小話題といった話題展開の中で，参加者間でナラティブの協働構築が行われることによってラポール形成がより促進されている様子が見られた。

1 点目は，大話題が転換する際，「司会進行」の発話が多く用いられることで，参加者全員がそれぞれ苦労話（中話題）を語る機会が与えられ，会話に参加しやすくなっていたということである。これにより，参加者全員で会話を盛り上げることができ，ラポール形成がしやすくなっていたと言える。特に J3 による「司会進行」が多く見られたが（5/8 件），これについて FUI で J1，J2 は，「司会進行」を多く行っていた J3 が「話しやすい状況を作って聞いてくれた」と述べ，一方 J3 も「会話がスムーズに進むように気を遣いながら話していた」と述べていた。ここから，「司会進行」によって，参加者全員がナラティブを語れるようにする配慮がうかがえる。

2 点目は，苦労話の反応部（小話題）で，聞き手が類似体験を簡潔に述べる情報提供をしたり，情報要求や言い換え，同意要求をして興味を示したり，「セリフ発話」で共感や理解を示したりして，語り手と共にナラティブを協働構築することによって，お互いに親近感や仲間意識を持つ様子が見られたということである。これについて FUI で 3 人は，「共感してくれて嬉しい」「深く掘り下げてくれたので会話が盛り上がった」と述べていた。こうした「聞き手によるナラティブの協働構築」によって，語り手と聞き手が互いに共感でき，よりラポール形成が促進されていたと言える。

3 点目は，1 つの大話題として，同じ包括的な観点から参加者の 3 人が 1 個ずつ類似した苦労話のナラティブを「まわしストーリー」のように語り，互いに情報や意見，感想等を共有するこ

とで，同じ気持ちになり，親近感や仲間意識を持つ様子が見られたということである。これについて，FUI で J1 が「全員の意見を聞きながら会話が進んでいた」，J2 は「相手の意見に対して共感しながら会話ができた」，J3 が「各自の様々な苦労話が聞けてより親近感を持った」と述べていた。ここから，中国留学という類似の経験を持つ 3 人が中国での苦労話を語り合い，お互いに理解，共感を示しながら，ナラティブを協働構築していくことで，ラポール形成を促進させていたと言える。

4 点目は，留学中に同じことを経験した 2 人が共に 1 つのナラティブを協力しながら語るという，2 人の「共－語り手候補」によるナラティブの協働構築により，参加者間の仲間意識を高める様子が見られた（中話題 7-1，中話題 8-1）。これについて，FUI で J1 は「留学中もよく話した話題ですごく懐かしく盛り上がった」，J2 は「J1 が私の話に補足してきてくれたので，同じことを考えていたのだと嬉しくなった」と述べていた。ここから，2 人で「共－語り手候補」としてナラティブを協働構築することで，会話を盛り上げ，ラポール形成を促進させていたと言える。

次に，上記の 4 点について，会話例（1），（2），（3），（4）を取り上げ，詳細に分析を行う。

4.2.1 大話題転換時の「司会進行」の発話

大話題の転換時に「司会進行」の発話が用いられることで，参加者全員がそれぞれ苦労話（中話題）を語ることができ，ラポール形成がしやすくなっていた様子が見られる会話例（1）を挙げる。

会話例（1）は，大話題 1「他の国の留学生との文化の違い」の始めにある「司会進行」の部分である。まず, J1 が会話の最初の 1 で, ＜会話の進行の提示＞を行う「司会進行」の発話によって，会話の始まりを宣言している。そして，J3 が 2 で「はい」とあいづちを打ち，J1 が 3 で笑っている。FUI で J1 が「知り合い同士での会話録画ということや今までの関わりの中でも私が仕切るような役割にはなっていなかったので，若干の気恥ずかしさから笑った」と述べていた。そこで，J3 が 4 で「え，じゃあ，みんなが中国の留学で経験した，苦労話を，するということですね」と＜同意要求＞を行う＜会話の進行の提示＞, ＜話題展開＞の「司会進行」を行っている。その後，5 で J1 が＜話者指名＞として自己指名をして苦労話のナラティブを開始しようとする。

この部分について FUI で, J3 が「会話の録画を担当している J1 が進行をしてくれると思ったが，ちょっと間があったので，僕が最初に話した方が良いと考えて，テーマ振りをした」という理由を述べていた。このように，会話全体で J3 が主に「司会進行」を担当しながら，話題の展開をコントロールしている様子が見られた。なお，J1 と J2 も自分の苦労話を語った後，「J3 さんなんか食べ物でなんかありました？」＜話者指名＞（会話例（3）参照）のように，J3 に話題を振っている様子も見られた。（表 3 の中話題 3-2 の前，中話題 4-4 の前の「司会進行」）。

ここから，参加者全員がナラティブを語る機会が持てるようにお互いに配慮して「司会進行」することで，会話が円滑に進行され，ナラティブを協働構築しやすくなり，それによって会話を盛り上げて，ラポール形成がしやすくなったのではないかと考えられる。

会話例（1）司会進行：大話題 1「他の国の留学生との文化の違い」

司会進行		1	J1	はい，始まり // ました。	会話の進行の提示
		2	J3	はい。	
		3	J1	{ 笑い }	
		4	J3	え，じゃあ，みんなが中国の留学で経験した，苦労話を，するということ，ですね。	会話の進行の提示 話題展開 同意要求
小話題	前置き	5	J1	はい。じゃあまず，私，// ひとついきます。	話者指名（自己指名）
		6	J2	はい。	

4.2.2 聞き手によるナラティブの協働構築

苦労話の反応部（小話題）で，聞き手が類似体験の＜情報提供＞をしたり，＜情報要求＞，＜言い換え＞，＜同意要求＞，＜セリフ発話＞で興味や理解を示したりして，語り手と共にナラティブを協働構築することによって，お互いに親近感や仲間意識を持つ様子が見られる会話例（2）を挙げる。

会話例（2）は，大話題 3「中国語力が足りない」の中で語られた J2 の苦労話の中話題 3-1「中国語力が足りず，外に行くのが怖い」の部分である。J2 が 78 で「私が，なんか一番大変だなってぱっと思いついたのは」と＜情報提供＞をして苦労話の【前置き】を述べ，続けて 80 で「中国語力が足りず，外に行くのが怖い」という苦労話の【語り部】を語っている。

それに対して，【反応部】で，J1 が 82 で「確かに」と＜同意＞を示し，84，86 で「なんかタクシーも乗るの怖かったし，話しかけられたらどうしようみたいな」，「分からんしどうしようってなったことはあったと思う」と，J2 の苦労話に対して，自分の類似体験を簡潔に述べて＜情報提供＞することで，聞き手としての＜共感＞を示している。これについて，FUI で J2 は「強く共感されていると感じた」と述べていた。

その後，J3 が 88 で J2 に外に行っても大丈夫になったきっかけについて＜情報要求＞し，J2 の語りへの興味を示すとともに，J2 の苦労話の【語り部】の展開を促している。これについて，FUI で J2 は「もともと自分がどうなったかを言ったほうがいいかなと思っていて，J3 がちょうど質問してくれたので話しやすかった」と述べていた。それを受け，89 で J2 は「治す方法は，なんか，荒治療しかないと」，「心の問題？」と述べ，＜情報提供＞と＜同意要求＞をしている。

これを受けて，【反応部】で，J3 が 90，97 で頷きながらあいづちを打っている。また，J1 は J2 の話を的確に理解して，98 で「ほんと心の持ちようだよね」と＜言い換え＞して＜同意要求＞し，101，104 で笑いながら，「間違ってもいいやー，みたいな」，「勘違いしてもいいや，みたいな」とその時の語り手の気持ちを引用した＜セリフ発話＞を用いて理解と共感を示している。また，J3 もあいづちを多く打ち，100 で「確かにね」と＜同意＞を示している。それについて，FUI で J2 は「2 人に理解してもらえて嬉しい」という感想を述べていた。

このように，J2 が語り手として自分の苦労話を語る際に，他の 2 人が聞き手として，類似体験の＜情報提供＞をしたり，＜情報要求＞，＜言い換え＞，＜同意要求＞をしたり，的確に理解した上で＜セリフ発話＞を用いたりすることで，共感や理解，興味を示す様子が見られた。これ

により，語り手と聞き手がナラティブを協働構築しつつ，「中国語を間違ってもいい」という価値観が共有されている。こうした「聞き手によるナラティブの協働構築」によって，語り手と聞き手が互いに共感でき，親近感や仲間意識を持つことで，ラポール形成が促進されていたと言える。

会話例（2）　聞き手によるナラティブの協働構築：
大話題 3「中国語力が足りない」－中話題 3-1「中国語力が足りず，外に行くのが怖い」（J2 の苦労話）
小話題 3-1-1 ～小話題 3-1-4

小話題	**前置き・語り部**	78	J2	だけどなんか，私が，なんか一番大変だなってぱっと思いついたのは，やっぱ，なんだろう，自分の中国語の力が足りなくて，	情報提供
		79	J1, J3	{ 頷き }	
		80	J2	あのー，ついてばっかで，乗り換えの時とか，全部の時になんか，何だろう，初めて聞く生の中国語というか，先生は学生に優しくしゃべってる（J3: うーん。うんうん。）じゃないですか, 大学とかも。留学生も頭で分かってるから優しくしゃべってくれるんですよ。（J1: うん。）けどなんかなんも，なんも，フラットな感じで中国語で話しかけてくれる人達の，そういう速さ，（J3: うん。）スピードとかが，（J1: あー。）全然耳が慣れてなくて，何言ってるか分からないし，（J3: うーん。）で，分からないってなった途端に，なんかその，声調が，なんかすごい，（J1: あー。）圧力がすごく出てきちゃって，それで結構なんか途中，前半の方は外行くのが怖いなっていうのは（J1: あー，うーん。）ありました。	情報提供
小話題	**反応部**	81	J3	うーん。	
		82	J1	確かに。	同意
		83	J2	そう。	
		84	J1	なんかタクシーも乗るの怖かったし，//「話しかけられたらちょっとどうしよう」，みたいな，	情報提供 セリフ発話 （類似体験提示による共感）
		85	J2	うんうん。	
		86	J1	// 分からんしどうしようってなったことはあったと思う。	情報提供 （類似体験提示による共感）
		87	J2	そうそう。	
小話題	**語り部**	88	J3	それは，なに，何がきっかけでこう，慣れたというか，あ，これ外に行っても大丈夫だなっていうふうに感じた，なんかきっかけみたいなのは。	情報要求
		89	J2	なんか，こう，外に出るの怖いなって考えてた時に，なんかもう，治す方法は，なんか，荒治療しかないと。（J3: はいはいはいはい。）（J1: { 笑い }）行ってとにかく慣れるしかないやと思って，（J1, J3: { 頷き }）もう外出て，町の人に話しかけられても，「そうなんですよー, 」みたいな感じで，話すようにしようと思って。なんか，// 心の問題？	情報提供 セリフ発話 同意要求

小話題	反応部	90	J3	はいはいはいはい。{ 頷き }	
		（中略）			
		97	J3	なるほどね。	
		98	J1	ねー。{ 頷き } ほんと心の持ちようだよね。	言い換え 同意要求
		99	J2	そう // そうそうそう。	
		100	J3	確かにね。	同意
		101	J1	「間違えても // いいやー」，みたいな。{ 笑い }	セリフ発話
		102	J3	うんうん。	
		103	J3	うん。	
		104	J1	「勘違いしてもいいや」，みたいな。	セリフ発話
		105	J3	はいはいはいはい。	

4.2.3 類似の苦労話のナラティブ（まわしストーリー）

1 つの大話題として，同じ包括的な観点から，参加者の 3 人が 1 個ずつ類似した苦労話のナラティブを「まわしストーリー」のように語り，互いに情報や意見，感想等を共有することで，親近感や仲間意識を持つ様子が見られる会話例（3）を挙げる。

会話例（3）は，3 人が 1 個ずつ類似の苦労話のナラティブ（中話題）を語っている部分で，大話題 4「中国での食生活」の一部である。まず J3 が 141 で「食生活で困ったこととかは, なかった？」と＜情報要求＞し，＜話題展開＞の「司会進行」をしている。それに対して，J1 と J2 は 142，143 で同時に発話したため，J1 が 143 で「あ，どうぞ。」と J2 を＜話者指名＞して発話を譲ろうとしたが，J2 は 144 で「J1。結構何でも食べてたよね J1。」と J1 を＜話者指名＞して，＜同意要求＞し，J1 に語らせようとしている。その後，J1 は 145 で「何でも食べてた」と，当時のことについて例を挙げながら＜情報提供＞しているが，苦労話のナラティブの形までは展開させなかった（中話題 4-1）[11]。それを受けて,【反応部】の 148-150 で J2, J3 はあいづちを打っている。

その後，151 で J2 が自身も「何でも食べられる // 方だったけど」と＜情報提供＞することで J1 の話に＜共感＞を示し，141 で J3 が提示した大話題 4「中国での食生活」に関連づけて，153 で「パクチーが食べられなかったが帰国後好きになった」という自分の苦労話（中話題 4-2）の【語り部】を【前置き】なしに語り始めている。この J2 の苦労話に対して，J3 は【反応部】の 154 で「そうだね，パクチー結構入ってたりするからね。」と＜同意＞を示している。そして，J2 は 157 で【語り部】を続け,「帰国してから，パクチーすごい恋しくなって，買いに行って食べたりとかするようになりました」と＜情報提供＞し，苦労話の結末を語っている。それに対して,【反応部】で J3 は 158 で「すごいな」と＜感想＞を述べている。J2 は笑いでそれに反応している。

そして，J1 は 160 で「でもそれすごい分かる」と J2 のナラティブに＜共感＞を示した後，自分も日本に帰国後，パクチーラーメンや追いパクチーを食べるようになったことを＜情報提供＞

[11] 中話題 4-1「なんでも食べた」は,「1 つ以上の時間的接合点が含まれるもの」というナラティブの定義に当てはまらないため，苦労話のナラティブとして認定しなかった。

して，類似体験「帰国後パクチーが好きになった」（中話題 4-3）について述べる【語り部】を【前置き】なしに展開させている。その後，【反応部】として，J3 が 162 であいづちを打っている。

さらに J1 と J2 は 163，164 で同時発話し，中国の食生活で困ったことに関して，「J3 さんなんか食べ物でなんかありました？」と＜情報要求＞することで，J3 を＜話者指名＞して「司会進行」[12] をしている。それを受けて，J3 は【語り部】の 165，168 で，留学中に食べ物で困ったことは何もなかったが，刺身や日本の味のラーメンが食べられず大変だったという，自分の苦労話（中話題 4-4）を語っている。それに対して【反応部】として J1 は 169 で「恋しくなる時ですね」と＜同意要求＞をし，J3 の苦労話への理解，共感を示している。J3 も 170 で＜同意＞を示し，「もう自分で作るしかない」とまとめている。

この大話題 4 の部分について，FUI で J1 は「全員の意見を聞きながら会話が進んでいた」，J2 は「相手の意見に対して共感しながら会話ができた」，J3 は「各自の様々な苦労話が聞けてより親近感を持った」と述べていた。

このように，類似の経験を持つ 3 人が苦労話を語り合い，お互いに理解，共感を示しながら，ナラティブを協働構築していくことで，親近感や仲間意識が高まり，ラポール形成がより促進されていたと言える。

会話例（3）類似の苦労話のナラティブ（まわしストーリー）：
大話題 4「中国での食生活」の一部―中話題 4-1 ～ 4-4

司会進行	141	J3	うん。あとなんだろ，あ，食べ物とかはどう？食べ物とかは，全然，困ったみたいな，これ食べれなかった，なんかちょっと，食べ，食生活で困ったこととかは，なかった？	話題展開 情報要求
	142	J2	// あの，（xxx），	情報提供
	143	J1	私それこそ，あ，どうぞ。	情報提供 話者指名

中話題 4-1：「なんでも食べた」

中話題	144	J2	あ，いいよいいよいいよ。なかった？ J1。結構何でも食べてたよね J1。	話者指名 同意要求
	145	J1	何でも食べてた。	情報提供
	146	J1,J2	{ 笑い }	
	147	J1	うん。これ食べれん，とかもなかったし，（J3: うん。）お腹壊すこともなかったし，（J3: うん。）でも弱い子は結構壊してたよね。	情報提供
	148	J2	// うんうんうん。	
	149	J3	うーん。	
	150	J3	なるほどなるほど。そうだね。	

[12] 163–164 の J1 と J2 による「司会進行」では，J3 を話者指名し，情報要求している。また，165 はそれに対する J3 の応答の情報提供となる。そのため，163–167 をまとめて J3 がナラティブを始めることについて交渉している【前置き】の部分とも言える。

中話題 4-2：苦労話「パクチーが食べられなかったが帰国後好きになった」

小話題	語り部	151	J2	うん。何だろう，でも，うちも結構なに，何でも食べられる // 方だったけど，	情報提供 共感
		152	J1	｛笑い｝うんうん。｛頷き｝	
		153	J2	あの，パクチー，（J3: はいはいはい。あー，パクチー。はいはいはいはい。）パクチーが，｛笑い｝ほんとに，はい。それでなんかこう，トングとかが一緒でたまたま入っちゃってたりとか，することもあるし，抜いてもらっても，（J3: うーん。）っていうので，「うわ，パクチーだよ」（J3:｛笑い｝）とかってなりました。	情報提供 セリフ発話
小話題	反応部	154	J3	そうだね，パクチー結構入ってたりするからね。	同意
		155	J2	はい。	
		156	J3	なるほど。そっか。	
小話題	語り部	157	J2	でも，そう，そのおかげで，帰国してから，パクチーすごい恋しくなって，（J3: えー。）（J1:｛笑い｝）買いに行って食べたりとかするようになり（J3: はいはいはいはい。）ました。	情報提供
	反応部	158	J3	なるほど。へえー。すごいな。	感想
		159	J2	｛笑い｝	

中話題 4-3：苦労話「帰国後パクチーが好きになった」

小話題	語り部	160	J1	でもそれすごい分かる。なんか中国の時はめっちゃ毛嫌いしてたけど，（J3: うん。）日本帰ってきて，なんかそのパクチーラーメンみたいなのとか，（J3: はいはいはいはい。）追いパクチーとか食べてる時に，（J3:｛笑い｝）「あー，私中国人になったんかな」と思って。｛笑い｝（J2:｛笑い｝）（xxx）っていうのはあったかな。	共感 セリフ発話 情報提供 （類似体験）
	反応部	161	--	（3.0）	
		162	J3	はいはいはい。	

中話題 4-4：苦労話「日本の味の物が食べられず大変だった」

司会進行		163	J1	//J3 さんなんか食べ物でなんかありました？	話者指名 情報要求
		164	J2	J3 さん，	話者指名
小話題	前置き語り部	165	J3	食べ物はー，何にもなかったね。	情報提供
		166	J1	なさそう // だね。｛笑い｝	
		167	J2	｛笑い｝	
		168	J3	でもやっぱりこう，刺身が食べたいとか，（J1: あー。）ってなった時には，やっぱり，すー，（地名）ではあんまり（J1: んー。）こう，おいしい刺身を食べるってなるとね，結構高かったりするし，（J2: うーん。）あとラーメン。ラーメンが僕は好きなので，すー，ラーメン食べたいなって思った時に，まあその日本と同じ味のラーメンっていうのは，ね，（J1, J2: うん。｛頷き｝）なかなか見つからなくて。（J1:（xxx））それだけ，大変でした。	情報提供
小話題	反応部	169	J1	恋しくなる時ですね。	同意要求
		170	J3	そう，ね。日本食，まあそれはもう自分で作るしかない // っていう // 感じやね。	同意
		171	J2	｛頷き｝	
		172	J1	｛頷き｝	

4.2.4 2 人の「共ー語り手候補」によるナラティブの協働構築

同じ経験をした 2 人の「共－語り手候補」によるナラティブの協働構築により，参加者間の仲間意識を高める様子が見られる会話例（4）を挙げる。

会話例（4）は，大話題 8「方言が理解できない」の中で語られた J1，J2 による苦労話の中話題 8-1「警備員の方言が分かりにくい」の部分である。ここでは，物語の源泉となる出来事に共に参与した 2 人が共にナラティブを構築する様子が見られた。J2 が 311 で「あの警備員のおじさん何言っているか分かりましたか？」と J1 と J3 に＜情報要求＞して【前置き】を述べて，苦労話を語るきっかけを作っている。これを受け，J2 と同じ経験がある J1 が 316 で「すごいあの人，すごかったもんね，方言が」と＜同意要求＞して共感を示し，【語り部】を始めている。その後，J2 が 317 で警備員が話しかけてくれるが全く会話ができなかったことを詳細に語っている。それに加えて，J1 が 318 で「え？え？って」，「あーあー！みたいな」と当時の戸惑う様子の発話を引用した＜セリフ発話＞をしながら中国語が聞き取れなかった自分達の状況を再現している。このように，J1 と J2 のやりとりは，当時の状況を実演する「掛け合い物語り」を形成し，臨場感を高めていると言える。さらに，J2 が 321 で「強い印象がある思い出だなあ」と＜感想＞を述べ，苦労話の結末をまとめている。また，その後の【反応部】でも J1 と J2 がまた各自の当時の＜感想＞や＜セリフ発話＞を述べ，お互いに共感を示している様子が見られた。

この部分について，FUI で J1 は「2 人の間でもよく話す話題だったので自分の中ではすごい懐かしく，盛り上がっていた」，J2 は「J1 が私の話に補足してきてくれたので，同じことを考えていたのだと嬉しくなった」と感想を述べていた。なお，J3 は聞き手としてこの苦労話全体であいづちや，頷き，笑いで，理解と興味を示している。それについて FUI で，「警備員のおじさんと話したことはほとんどなかったので，特別な思いはないが，2 人の話を聞いて楽しそうだなと思った」という感想を述べていた。

このように，同じ経験を持つ 2 人が「共－語り手候補」として苦労話のナラティブを協働構築することで，会話を盛り上げ，仲間意識を高めて，ラポール形成を促進させていたと考えられる。

会話例（4）2 人の「共－語り手候補」によるナラティブの協働構築：
大話題 8「方言が理解できない」－中話題 8-1「警備員の方言が分かりにくい」（J1, J2 の苦労話）

小話題	**前置き**	309	J2	あと，なんか，方言？ // 方言っていうか，	情報要求
		310	J3	うん。	
		311	J2	あの警備員のおじさん // 何言ってるか // 分かりましたか？	情報要求
		312	J1	あー。{ 笑い }	
		313	J3	あー，なるほど。	
		314	J3	あー，// そうだね。{ 頷き }	
		315	J1	確かに。{ 頷き }	
	語り部	316	J1	すごいあの人，すごかったもんね，方言が。{ 笑い }	同意要求
		317	J2	まあ，ほんとに何言ってるか分かんな（J1: うんー，うん。{ 頷き }）（J3: { 頷き }）くて。でも，話しかけてくれるんですよ。（J1: { 笑い }）「J2」，みたいな感じで，（J3: はいはいはいはい。）（J1, J3: うんうん。{ 頷き }）だから，「おおっ」，みたいなことやるんですけど，（J1: { 頷き } うん，うん。）（J3: { 頷き }）そっから会話全然できなくて。（J3: { 笑い }）	情報提供 セリフ発話
		318	J1	てかずっと笑ってるだけみたいな。（J2: そうそうそう。{ 頷き }）「え？え？」って。「あーあー」，（J2, J3: { 笑い }）みたいな。{ 笑い } 適当に流す，みたいな。	情報提供 セリフ発話

		319	J2	// そう。	
		320	J3	うん。	
		321	J2	そういうのもちょっとなんだろう，話しかけられて嬉しいのに，(J1: うん。)なんか聞き取れなくて申し訳ない，(J1: うんうん。{ 頷き }) というか。っていうので，困ってはないん (J3: うん。{ 頷き }) ですけど，ちょっと，まあ，強い印象がある思い出だなあ，っていうか。	情報提供 感想
小話題	**反応部**	322	J3	{ 頷き }	
		323	J1	確かに。	
		324	J2	うん。	
		325	J1	一番なんかもどかしさみたいな感じる時だったかな。	感想
		326	J2	// そう。そう。	
		327	J3	{ 頷き }	
		328	J1	「くそ，分からん」，みたいな。	セリフ発話
		329	J3	うんー。	

5. 考察と教育への提案

本節では，上記の会話データの分析結果を踏まえて，考察と教育への提案を述べる。5.1 で総合的な考察，5.2 で日本語教育への提案について述べる。

5.1 総合的な考察

本研究における話題展開とナラティブの協働構築の分析から，参加者間でナラティブを共に語り，共感や理解を示し合うことで，親近感，仲間意識が高まり，それによってラポール形成が促進されていると考えられる点が 4 つ見られた。

(1) 大話題転換時の「司会進行」の発話

日常会話の雑談の中でナラティブを複数の参加者で順番に語る際，しばしば話し合いのように「司会進行」の役割を担う者が出てくる場合がある。今回の会話データでも「留学中の苦労話」というテーマの指定があるため，3 人の参加者が互いに「司会進行」を行いながら，類似した苦労話を繋いで大話題を展開させて，参加者全員が会話に参加しやすくしていた。胡・石黒（2018）でも，ピア・リーディング授業中の話し合いを分析した結果，司会役がいる方が参加者間の発話の均衡を保ち，公平な発話機会を与え，議論の観点を整理したり深めたりする様子が見られたとしている。ここから，「司会進行」の役割という点で，ナラティブと話し合いの接点が見出せると言えよう。

そして，オンラインによる会話では，「音声と映像の時間的ずれ」「視線の不一致」「空間の非共有」によって，参加者間の話者交替（turn-taking）が難しいとされている（尹 2004）。現在は，オンライン化が急速に進み，「音声と映像の時間的ずれ」の問題は改善されてきたものの，「視線の不一致」「空間の非共有」等により，「沈黙」や「発話重複」「発話のタイミングの難しさ」等

の問題が見られる場合がある（村上 2021）[13]。だが，村上（2021）によると，発話の始まりや終わりを示す表現（例：私いいですか／以上です）を多く用いて発話順番を明示的に表示していた話し合いグループは，話者交替が円滑に行われ，「発話重複」が見られなかったとしている。本研究のオンライン会話でも，参加者の 3 人が「司会進行」を行うことによって，話者交替をスムーズに行い，会話の進行，話題の展開をうまくコントロールしようとしていたと言える。これにより，参加者全員がオンラインでもより参加しやすくなり，ラポール形成がしやすくなっていたと言える。

（2）聞き手によるナラティブの協働構築

苦労話の【反応部】（小話題）で聞き手が類似体験の＜情報提供＞をしたり，＜情報要求＞，＜言い換え＞，＜同意要求＞，＜セリフ発話＞で興味や理解を示したりして，語り手と共にナラティブを協働構築することで，お互いに親近感や仲間意識を持っていた。植野（2012）は，聞き手が語りの内容に対して自らの経験や知識，思いを述べながら語り手に働きかけることは語り手との親密で対等な関係性を創出・維持するために重要であると述べている。また，三井（2018）でも，語り手と聞き手がナラティブに対する意見，解釈といった評価をすることで，価値観の共有を明確にし，仲間意識を高め，そのナラティブを「語られる価値」のあるものとして位置付けることができるとしている。会話例（2）では，J1 が聞き手として類似体験を語り，語り手 J2 の当時の気持ちを代弁して共感を示したりしている様子が見られた。ここから，聞き手 J1 が語り手 J2 のナラティブに対する的確な理解を前面に出し，同じような苦労を経験した仲間であるという意識を高めることで，ラポール形成を促進させていたと言える。

（3）類似の苦労話のナラティブ（まわしストーリー）

1 つの大話題として，3 人の参加者が同じ包括的な観点から，類似の苦労話（中話題）をそれぞれ 1 個ずつ語り，互いに情報や意見，感想等を共有して，ナラティブを協働構築していくことで，親近感や仲間意識を持つことができていた。これは，参加者達が類似した観点や話題で各自の体験を語っていく「まわしストーリー」（Tannen 1984, 2005）であると言える。そのため，会話例（3）では「前置き」を明示的に話さず語り出すという「まわしストーリー」の特徴も見られた。Tannen（1984, 2005）では，「まわしストーリー」を行い，それに対して互いに評価，質問等の積極的な反応を行うことで，参加者間のラポール形成に繋がりうるとしている。会話例（3）でも，類似の留学中の食生活に関する経験を持つ 3 人が苦労話を「まわしストーリー」として語り合い，お互いに理解，共感を示しながら，ナラティブを協働構築していくことで，仲間意識を高め，ラポール形成をより促進させていたと言える。

[13] 村上（2021）は，オンライン会話では，対面会話で用いられている視線，頭の動き，指差し等の非言語的要素で話者交替（中井 2003, 高梨 2016）がうまくできないため，「沈黙」が発生してしまうのではないかと指摘している。

（4）2 人の「共－語り手候補」によるナラティブの協働構築

同じ経験をした 2 人の参加者が共通の経験を「共－語り手候補」（Lerner 1992）として協力しながら語ることで，会話を盛り上げ，参加者間の仲間意識を高めていた。そして，2 人の「共－語り手候補」で，出来事を詳述したり，＜セリフ発話＞を用いて当時の状況を再現したりする，「掛け合い物語り」（串田 1999）を形成する様子が見られた。特に，経験を共有していない聞き手に対して，「共－語り手候補」の 2 人が＜セリフ発話＞を用いたやりとりを披露することで，ナラティブで語られる当時の状況の臨場感が増して会話が盛り上がり，ラポール形成に繋がっていたと言える。

なお, 今回の会話データでは確認できなかったが, 時に 2 人による「共－語り手候補」での「掛け合い物語り」は，同一経験がない者や「共－語り手候補」ではない者がうまくナラティブに参加できず，疎外感を持ってしまう可能性もある。他の参加者の理解や興味の度合い等に配慮しながらナラティブを語る必要性もあると言えよう [14]。

5.2 日本語教育への提案

これまでの日本語の接触場面におけるナラティブの研究では, 母語場面の特徴と比較しながら, 上級学習者が語り手・聞き手として行う言語・非言語行動を分析しているものがある（佐々木 2010; 張 2019; 夏 2020）。これらの研究では, 特に, 日中接触場面におけるナラティブの前置き（導入）で，語り手の学習者が先行文脈と異なる話題のナラティブを導入するという特徴が報告されている（張 2019）。また，聞き手の学習者がナラティブの反応部（終結部）であいづちしか用いずに終わらせてしまうという特徴も挙げられている（佐々木 2010）。さらに，聞き手の学習者がナラティブの前置き（導入部）で，割り込んで自分の類似体験を語ったり，ナラティブの反応部（終結部）で反応が薄かったりする等の特徴も指摘されている（夏 2020）。

このことから，本研究で 3 人の母語話者が苦労話を協働構築する際に見られた，共感を示すための「セリフ発話」や，2 人が「共－語り手候補」としてナラティブを語る等の言語・非言語行動を適切に用いてナラティブに参加していくことは，日本語学習者にとって難易度が高いと言える。このような母語場面の会話におけるナラティブの協働構築の特徴を日本語の会話教育に導入し，学習者に意識させ，自身のナラティブ参加の際に活かせるようにすることが重要であると考えられる。

そこで，本研究で得られた分析結果をもとに，日本語学習者がナラティブの協働構築ができるようになることを目指した指導学習項目を表 4 にまとめた。これらの項目について日本語の会話

[14] 大場（2006, 2012）では，日本語母語話者知人関係の三者会話において，2 人が情報を共有しており，1 人が情報を共有していないという不均衡な参加機会の状態が見られたという。だが，情報を共有していない 1 人の参加者が他の 2 人を見ながら話を聞く，あいづちや笑い，情報要求をする等の聞き手の役割を自身が適切に果たしているという認識があった場合，会話が楽しかった等の肯定的な評価に繋がりうるとしている。一方，佐藤他（2022）では，接触場面における二者会話と三者会話を比較分析した結果，特に三者会話において，2 人の母語話者と非母語話者の間で情報が共有されていない場合，非母語話者の発話の理解や会話の参加が困難になる様子が見られたと報告されている。

教育で適宜取り上げていくことで，学習者が会話の話題展開も意識しつつ，他の参加者とナラティブを協働構築し，ラポール形成がしていけるようになると考えられる。

表 4　ナラティブの協働構築に関する指導学習項目

1. 会話の司会進行と話題展開	・多人数の会話で，参加者間の発話の均衡を保ち，全員が参加してナラティブを語れるように，「司会進行」の発話を適宜行う。例えば，＜会話の進行の提示＞，＜話題展開＞，＜話者指名（自己指名）＞等の発話で，話題を提示したり，話題を展開させたり，次の語り手を指名したりして，会話の進行を促進し，話しやすい状況を作る。
2. 語り手と共－語り手候補	・語り手として，類似の観点・話題をもとに，各自の経験を語る，「まわしストーリー」を行う。その際，自身の経験について，他の参加者の話と関連づけながら話すことで，他の参加者の話への共感を示し，お互いに親近感が持てるようにする。 ・同じ出来事を共に経験した場合，または，語られるナラティブの内容を既に知っている場合，「共－語り手候補」として，語り手に協力してナラティブの内容の修正や詳細説明を行い，「掛け合い物語り」を形成する。その際，＜セリフ発話＞を用いて，語り手とともに臨場感をもって当時の状況を再現し，会話を盛り上げる。
3. 聞き手	・語り手に＜情報要求＞をして，ナラティブの展開を促す。 ・語り手のナラティブの【反応部】等で，疑似体験を簡潔に述べたり，＜セリフ発話＞を用いて登場人物や語り手の気持ちを代弁したりして，ナラティブに対する的確な理解と共感を示す。 ・＜言い換え＞，＜同意要求＞，＜感想＞，＜同意＞，＜共感＞を表す実質的な発話や，あいづち的な発話を用いて，ナラティブに対する理解や共感を示す。 ・笑い，頷き等の非言語行動を用いて，興味を持って聞いていることを示す。

6. 結論と今後の課題

以上，類似の留学経験を持つ 3 人の日本語母語話者が語り合う留学中の苦労話のナラティブを取り上げ，参加者の会話時の意識とともに，話題展開の中での言語・非言語行動によるナラティブの協働構築の仕方を分析した。その結果，次の 4 点から，話題展開の中でナラティブの協働構築が行われることによって，参加者間で親近感，仲間意識が高まり，ラポール形成を行っていることが明らかになった。

(1)　参加者間で「司会進行」を行うことで，類似の経験を持つ 3 人の苦労話を繋いで大話題を展開させており，それによって，参加者全員が会話に参加しやすくなっていた。これにより，参加者全員で会話を盛り上げることができていた。

(2)　苦労話の反応部（小話題）で，聞き手が類似体験を簡潔に述べる情報提供をしたり，情報要求や言い換え，同意要求をして興味を示したり，「セリフ発話」で共感や理解を示したりして，語り手と共にナラティブを協働構築していた。

(3)　1 つの大話題として，3 人の参加者が同じ包括的な観点から，類似の苦労話（中話題）をそれぞれ 1 個ずつ語り，互いに情報や意見，感想等を共有して，ナラティブを協働構築していた。

(4)　2 人で共通の経験を「共－語り手候補」として協力しながら語ることで，会話を盛り上げていた。

そして，これらの分析結果をもとに，会話の「司会進行」と話題展開，語り手と聞き手としてのナラティブへの参加の仕方等についてまとめ，日本語の会話教育のための指導学習項目として

提案した。

今後の課題は，さらにデータを増やし，ナラティブの協働構築とラポール形成の関係をより詳細に分析していくことである。本研究では，3 人の母語話者による苦労話の会話を 1 つのみ分析対象としたため，分析結果を一般化することが難しいと考えられる。また，会話する際，参加者に「中国留学中の苦労話」というテーマの指示を行ったため，話し合いのような形が取られ，雑談の中で見られるような自然発生的なナラティブや，互いに内容的に関連性のないナラティブの話題展開等を見ることができなかった。今後は，日常会話の雑談の中に現れる様々な話題について語るナラティブの協働構築とラポール形成の関係性についても探る必要があると言える。さらに，日本語学習者が参加する接触場面，および，日本語学習者自身の母語場面におけるナラティブの協働構築の特徴も明らかにし，日本語母語場面との共通点・相違点を探ることで，その知見を日本語の会話教育に活かしたいと考える。

参照文献

井出里咲子（2013）「ナラティブにおける聞き手の役割とパフォーマンス性　震災体験の語りの分析より」佐藤彰・秦かおり（編）『ナラティブ研究の最前線―人は語ることで何をなすのか』43–63. 東京：ひつじ書房.

植野貴志子（2012）「聞き手行動の社会言語学的考察―語りに対する聞き手の働きかけ―」『日本女子大学紀要 文学部』61: 57–68. http://id.nii.ac.jp/1133/00000827/

内山エミ・山内豊明（2021）「術前訪問における患者とのラポール形成を導く要素―文献による手術室看護師と病棟看護師の比較検討―」『ヒューマンケア研究学会誌』12(1): 9–19. http://id.nii.ac.jp/1068/00000669/

大場美和子（2006）「三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割―接触場面と母語場面における会話参加プロセスの分析―」村岡英裕（編）『多文化共生社会における言語管理―接触場面の言語管理研究 vol. 4―』37–56. 千葉大学大学院社会文化科学研究科.

大場美和子（2012）『接触場面における三者会話の研究』東京：ひつじ書房.

夏雨佳（2020）「日本語母語場面と日中接触場面における「ナラティブ」の受け手が行う言語・非言語行動に関する分析―フォローアップ・インタビューによる語り手と受け手の意識の考察から―」『小出記念日本語教育研究会論文集』29: 268.

夏雨佳・中井陽子（2022）「日本語のナラティブの協働構築における参加者の意識と話題展開の分析―母語話者同士で語る留学中の苦労話による人間関係促進のあり方の探求―」『社会言語科学会第 46 回大会発表論文集』42–45.

串田秀也（1999）「共有知識と経験への権限―物語りにおける参与の組織化の一局面に関する試論―」『大阪教育大学紀要』47(2): 59–81. http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/3387

倉田芳弥・楊虹・佐々木泰子（2009）「日本人学生による討論の分析―進行役に着目して―」『多文化共生社会における幼児から大学生までのコミュニケーション能力育成モデルの開発』（平成 18 年度～ 20 年度科学研究費補助金研究基盤研究（B）研究成果報告書　課題番号：18320080 研究代表者：佐々木泰子）162–170.

胡方方・石黒圭（2018）「司会役の役割　司会役はグループ・ディスカッションにどこまで貢献できるのか」石黒圭（編著）『どうすれば協働学習がうまくいくか　失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』127–150. 東京：ココ出版.

佐々木泰子（2010）「接触場面と母語場面―体験談の終結部から見たその特徴―」『言語文化と日本語教育』39: 33–40. http://hdl.handle.net/10083/52010

佐藤茉奈花・夏雨佳・中井陽子（2022）「日中初対面接触場面の二者会話と三者会話に関する事例分析―話題開始の発話とフォローアップ・インタビューから見る非母語話者の理解・参加の比較―」『社会言語科学』24(2): 21–36.

ザトラウスキー，ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』東京：くろしお出版.

ザトラウスキー，ポリー（2003）「日本語の会話での話題・エピソード・発話連鎖について」『日本語教育学会秋季大会予稿集』227–229.
杉戸清樹（1987）「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相―座談資料の分析―』68–106. 東京：三省堂. http://doi.org/10.15084/00001275
高梨克也（2016）『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』京都：ナカニシヤ出版.
張未未（2019）「日本語の雑談における「物語」の導入方法―日本語母語場面と日中接触場面の相違―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』26(2): 179–190. http://hdl.handle.net/2065/00061751
中井陽子（2003）「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』3: 23–39. http://hdl.handle.net/2065/3513
中井陽子（2012）『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』東京：ひつじ書房.
西川玲子（2005）「日常会話に起こるナラティブの協働形成―理論構築活動としてのナラティブ―」『社会言語科学』7(2): 25–38. https://doi.org/10.19024/jajls.7.2_25
堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』東京：くろしお出版.
三井久美子（2018）「価値観共有を目的としたナラティブの協働構築」『立命館経営学』56(5): 71–94. http://doi.org/10.34382/00001275
南不二男（1981）「日常会話の話題の推移：松江テクストを資料として」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会（編）『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢 I 方言研究の推進』87–112. 東京：三省堂.
三牧陽子（1999）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー―大学生会話の分析―」『日本語教育』103: 49–58.
村上智子（2021）「遠隔教育の有用性と問題点の考察―コロナ禍における遠隔による「インターアクション 6」実践事例を通じて―」岩本遠億・上原由美子（編）『神田外語大学留学生別科 オンラインによるインターアクション日本語教育の可能性 2020 年度春学期 オンライン授業・活動報告』74–96. https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/main/faculties/bekka/#13pdf
山本真理（2013）「物語の受け手によるセリフ発話―物語の相互行為的展開―」『社会言語科学』16(1): 139–159. https://doi.org/10.19024/jajls.16.1_139
山本真理（2014）「物語の受け手によるセリフ発話―参与者間の共感関係の構築に関する会話分析的研究―」博士学位論文，北海道大学. https://doi.org/10.14943/doctoral.k11428
尹智鉉（2004）「ビデオ会議システムを介した遠隔接触場面における言語管理―「turn-taking」と処理過程をめぐって―」『世界の日本語教育』14: 35–52. http://doi.org/10.20649/00000342
李麗燕（2000）『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究　会話管理の観点から』東京：くろしお出版.
Labov, William (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
Lerner, Gene H. (1992) Assisted storytelling: Developing shared knowledge as a practical matter, *Qualitative Sociology* 15(3): 247–271. https://doi.org/10.1007/BF00990328
Maynard. Senko K. (1989) *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex.
Ochs, Elinor, Carolyn Taylor, Dina Rudolph and Ruth Smith (1992) Story-telling as a theory-building activity. *Discourse processes* 15: 37–32. https://doi.org/10.1080/01638539209544801
Sacks, Harvey (1974) An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In: Richard Bauman and Joel Sherzer (eds.) *Explorations in the ethnography of speaking*, 337–353. Cambridge: Cambridge University Press.
Tannen, Deborah (1984; 2005) *Conversational style: Analyzing talk among friends*. New York: Oxford University Press.
Tannen, Deborah (1986) *That's not what I meant! How conversational style makes or breaks relationships*. New York: Ballantine Books.

Rapport Development through Collaborative Construction of Narratives as Seen in Narratives of Difficulty during Study Abroad by Japanese Native Speakers

NAKAI Yoko[a]　　XIA Yujia[b]

[a]Tokyo University of Foreign Studies / Project Collaborator, NINJAL
[b]Graduate Student, Tokyo University of Foreign Studies

Abstract

We examined collaboratively constructed narratives which occurred in topic development, while referencing what the participants thought and felt during the conversation, which were ascertained through follow-up interviews. The data consist of a recording of a conversation among three native Japanese speakers who had similar experiences, in which they discuss the difficulties they encountered while studying in China. The analysis demonstrated that engaging in collaborative narratives about difficulties during topic development elicited a greater sense of intimacy and comradeship among the speakers and helped them developed rapport, as seen in the following items:

(1) By facilitating the conversation, the three participants connected their narratives and developed major topics, which helped all the participants participate and livened up the conversation.
(2) In the reaction part of the narratives (minor subtopics), the listeners collaboratively constructed narratives with the narrator, such as by briefly presenting information on similar experiences, showing their interest by rephrasing and requesting information and agreement, and showing sympathy by using "serif utterances," etc.
(3) Each of the three participants told a similar narrative (subtopic) that served to form a major topic which constituted a comprehensive viewpoint. Then, they shared information, opinions, and impressions on their narratives, and in so doing, collaboratively constructed narratives.
(4) By collaboratively discussing their shared experiences, two of the participants livened up the conversation.

Based on these results, we proposed a set of learning items with which Japanese language learners could learn how to develop rapport through collaboratively constructing narratives.

Keywords: narrative, collaborative construction, topic development, rapport development, follow-up interview